

【原著論文】

トゥルネン = スポーツ抗争に関する一考察  
—19世紀後半にみる国民祝祭としてのドイツ・オリンピア計画について—

波多腰克晃

体育原理研究室

A study of the rivalry between *Turnen* and sport

—Plans for the German Olympia as a National Festival in the Latter Half  
of the Nineteenth Century—

Katsuaki HATAKOSHI

**Abstract:** This study examines the rivalry between *Turnen* and sport seen in Germany in the latter half of the nineteenth century, with a particular focus on the proposed plans put forward by members of the ZA (Der Zentralausschuß Förderung der Volks- und Jugendspiele in Deutschland), which planned the German Olympia. Schmidt's proposal was a plan that included the political factors accompanying participation in an international Olympic Games, and it envisaged a German Olympia held with a reconciliation between *Turnen* and sport. Raydt wished for both *Turnen* and sport to be held together in peace, but accepted that this would be difficult. He regarded sporting competitions for each individual event as the core of the plan. Schenckendorff wanted the German Olympia to be a festival on a grand scale, but in the end he became entangled in financial difficulties and his proposal ended in failure. However, under his influence this proposal contributed to the development of sporting competitions accompanied by both festivals and games in different parts of Germany. Schenckendorff's was not the only proposal to fail, as those of Schmidt and Raydt suffered the same outcome. Nonetheless, this study shows that the plans for the German Olympia put forward by the three members of the ZA attempted to find a close relationship and a commonality between *Turnen* and Sport.

(Received: August 11, 2010 Accepted: September 3, 2010)

**Key words:** F. A. Schmidt, H. Raydt, E. v. Schenckendorff

**キーワード:** F・A・シュミット, H・ライト, E・v・シェンケンドルフ

1. はじめに

本稿はドイツの19世紀後半にみられたトゥルネン = スポーツ抗争に着目し、とりわけドイツ・オリンピアの開催を計画した「ドイツ民族・青少年遊戯促進中央委員会 Der Zentralausschuß Förderung der Volks- und Jugendspiele in Deutschland」(以下 ZA と表記)のメンバーである F・A・シュミット (F. A. Schmidt), H・ライト (H. Raydt), E・v・シェンケンドルフ (E. v. Schenckendorff) による計画案について検討しようとするものである。

まず、1896年、第1回オリンピック競技大会への参加をめぐる、ドイツ国内では参加・不参加の議論が巻き起っていたわけであるが、オリンピック競技大会

参加にかかわるドイツ体育界の代表的な立場を担っていたのは、当時ドイツ最大のトゥルネン運動推進母体として結成された「ドイツ体操協会 Deutsche Turnerschaft」(以下 DT と表記)であったといえよう。なお DT は 1860 年代以来、「ドイツ体操祭 Deutsches Turnfest」をドイツ全土で開催しており、トゥルネンの実践を中心としたこの祭典には毎回数万人の参加者があった。

この DT とともに国際オリンピック競技大会に深くかかわることになったのが、シェンケンドルフの呼びかけで結成された ZA である。ZA は DT のような諸組織の連合体ではなく、教育関係者や政治家、体育界の指導的人物によって構成されており、ドイツ国民や政

府当局に対して国民的身体教育の拡充と「教育による国防力 Wehrkraft durch Erziehung」の強化を目的としていた。

ところで、ZA が身体教育の具体的な手段として推奨していたのはトゥルネンにとどまらなかった。組織名に含まれているように「遊戯 (Spiel)」すなわち、実際に ZA が推奨したのは球技やローラスケート等のスポーツ種目も含まれていたのである。こんにちではトゥルネン (体操) もまたスポーツのなかの一分野ということになるが、当時の DT の見解では、ドイツの伝統的文化であるトゥルネンと外来のスポーツは相容れない異質なものであり、ドイツ民族性に有害な影響をもたらすものであった。この「非ドイツ的」なるスポーツの特徴として一それゆえ、理念論争の集中点として一トゥルネンの擁護者 E・ノイエンドルフ (E. Neuendorff) は、「一面性 (Einseitigkeit)」、「全力投入 (Voller Einsatz)」、「闘争意志 (Wille zum Kampf)」<sup>1)</sup> の三点をあげている。

しかし、ZA と DT の関係を敵対的なものとして理解することはできない。むしろ ZA のメンバーには DT 会長 F・ゲッツ (F. Goetz) や同幹部でボン大学医学部教授のシュミット、A・ヘルマン (A. Hermann) 等の DT 指導者たちが名を連ねており、両組織はその主張に関しても基本的には協動的であった<sup>2)</sup>。反対に、スポーツのみを推奨しドイツ固有の文化としてのトゥルネンの価値を尊重しなかったり、あるいはドイツ国民の身体能力の向上に寄与するところがないと考えられるような理念・組織に対しては、DT は決して譲歩することはなかったのであり<sup>3)</sup>、フランス主導のオリンピック競技大会は DT にとってまさにそのような存在であった。

そうした状況のなか、パリのジル・ブラス紙に掲載された P・ド・クーベルタン (P. de Coubertin) のインタビュー<sup>4)</sup> がドイツ日刊紙に掲載され、ドイツ国民の激しい批判が増し、DT の理事でもあるシュミットは 1895 年秋に ZA に激しく忠告してオリンピック競技大会への参加を思いとどまらせた。シュミットはただちに「国内オリンピック競技大会」のプログラムを公表した<sup>5)</sup>。この事件を契機に国内オリンピック競技大会、すなわちドイツ・オリンピア計画が考案されていくわけであるが、従来までの「トゥルネン＝スポーツ抗争」に関する研究では「オリンピック問題」<sup>6)</sup> について取り上げているものの、具体的にドイツ国内において如何なる議論が展開されたのか明らかにされていない。

そこで本稿では、ジル・ブラス事件を契機にトゥルネン＝スポーツ抗争における両者の近縁性と共通性を見出す努力を続けた ZA のメンバーによるドイツ・オリンピア計画について検討する。

## 2. シュミットによるドイツ・オリンピア計画の成立理念と内容

### 1) 成立理念

これまでのドイツスポーツ史における研究では ZA によるオリンピック競技大会参加に関する 1895 年の政治的決定という視点を見逃してきた<sup>7)</sup>。

第 1 回オリンピック競技大会ギリシア組織委員会第 1 回会議への参加に関して、シュミットは困惑していた。なぜなら、その会議への参加に招待されたのはドイツのフェラインや連盟ではなく、シェンケンドルフに依頼していたからである<sup>8)</sup>。シェンケンドルフは当時 ZA の会長であり、ドイツにおける少年手工業者のためのフェラインの会長でもあり、またベルリンのプロイセン連邦議会議員でもあった。そのため、ギリシアの委員会はシェンケンドルフをあらゆる領域に対して返答ができる重要な仲介者としてみなしていた<sup>9)</sup>。

シェンケンドルフ自身はこの招待に対して 1895 年に開催された ZA のマグデブルグ会議 (6 月 29 日、30 日) の際に提案する良い機会であると判断していた<sup>10)</sup>。そして、このギリシアの招待を重要な事項として保留すべきであるという報告書を作成し、シュミットに提案した。シュミットはそれを基にこれまでに報告されたものを考慮し、草案をまとめた<sup>11)</sup>。

シュミットは報告<sup>12)</sup> のなかで独自の意見を述べ、国際オリンピック委員会 (IOC) のメンバーと新しく考案されたオリンピック競技を痛烈に批判し、古代オリンピックに精通している者によるメンバー構成とあくまでも古代オリンピックを基準とした悠然たる競技であるべきと報告した<sup>13)</sup>。シュミットによる報告と引き続き行われたマグデブルグ会議の協議の結果、公式には参加しないという決議に至った<sup>14)</sup>。もちろん、シュミットもそれに同意した<sup>15)</sup>。

しかしながら、このマグデブルグ会議は一時的な処置に過ぎなかった。なぜなら、シュミットは別の独自の考え方を持っていたからである<sup>16)</sup>。シュミットは議論や協議を重ねていくうちにある提案をした。それはトゥルネンとスポーツが上層部レベルで和解するためのドイツ・オリンピアであった。場合によってはその延長線上に身体運動 (Leibesübungen) の考えに基づいた領域の国際化をも視野に入れていた<sup>17)</sup>。こうしたことは具体的ではないとしてもすでに以前から考えていたことではあった<sup>18)</sup>。当時トゥルネンとスポーツは分裂状態に陥っていたため、ドイツ・オリンピアの開催を通して両者の和解を図るために、再びシェンケンドルフと話し合いを始めた<sup>19)</sup>。

## 2) シュミットによるドイツ・オリンピア計画の内容

シェンケンドルフはシュミットに、1895年10月に予定している役員会において国内オリンピア(ドイツ・オリンピア)計画に関する説明を要請した。

シュミットはその提案を受け入れ、引き続き活動を続けた。その背景にはトゥルネン改革者として一年ほどDTと対立してきたからであった。すなわち、既存のトゥルネンは埃まみれの体育館でたいてい器械体操が行われていたために、“民族固有の練習方法”を維持しつつ、戸外の新鮮な空気が流れる場所で遊戯(トゥルネン遊戯、青少年遊戯)によってトゥルネンが行われなければならないと考えていた。そして、トゥルネンとスポーツを結びつけることを勸案し、間近に迫ったエスリンゲンにおけるトゥルネン会議(7月22、23日)の際に改革案を提出したが取り下げられた<sup>20)</sup>。その後、1895年10月5日に“ドイツ・オリンピア”の名のもとに、ドイツのトゥルネンの改革とともにトゥルネンとスポーツを結び付けるためにハノーファーで開催されたZAの役員会議の際、これまでのDTとの対立的な経緯に関する詳細な交渉を説明しようとしたのである。シュミットはこれまでに準備してきた計画案を以下のように説明している。

我々はひとつにまとまろう。……(中略：括弧内筆者)そして終わりにしよう。すなわち、まったくの絶望的な状態を放置するよりも、異なるスポーツ分野(sportzweige)が同等な立場で発展し、民族的トゥルネン(Volksturnen)の名が鳴り響くことを前提にして各種のスポーツ分野が統合することの試みを意味している。

共通の競技場においてスポーツ、遊戯そしてトゥルネンの団体がひとつにまとまることができているなら、統一の必要性にすら気づくことはなかった<sup>21)</sup>。

トゥルネンをするドイツの有能な若者たちがスポーツ的な競技会のようにすばらしい競技場にまとまることや祖国を基底にしたあらゆる活動が真の行為と言えよう。すなわちそれは、ドイツ・オリンピアを意味することになる。……(中略：括弧内筆者)

われわれが望めば、国際的なオリンピアとの統一をはかることは不可能ではない。しかし、とりわけ急務なことは、我々ドイツの地において演技や競技を行うことであり、国際化ではなく真の国内競技大会である。身体運動によって国民(Volk)の身体的、道徳的な健康を考慮し、地に根付いた効率的な支援を見出そうとする考えがすべての領域に及ぶことを望んでいる。特にDTに関与している人々には早急に対応してもらえることを勧告した。DTにとって

は“新たな課題”となる。つまり、育成することや成果を残すためにスポーツ的なやり方を取り入れ、それによってひとつの道を歩むことである。別の方法(国際化：括弧内筆者)を用いた統一はともかくとして、まずは、ドイツ・オリンピアのために道を切り開こう!<sup>22)</sup>

なぜシュミットはこの計画(1895年6月30日から10月5日)を考えるに至ったのか、1895年10月24日付けのDTの機関誌であるドイツ体操新聞(Deutsche Turn-Zeitung)の第4号に掲載された論文のタイトルをみれば理解し得るであろう<sup>23)</sup>。つまりそれは、論文の表題が中心的なものとして扱われなかったことである。シュミットも言及しているように、DTに対して“早急な”事項であることを伝え、トゥルネンとスポーツの統一の必要性をDTにとって“新たな課題”として実現させるように示したにもかかわらず、DTが軽視していたのである。しかしながら、シュミットは翌年には別の方法を用いて展開することを試みる<sup>24)</sup>。それは、国際的なオリンピックと明確に区別させ、また、ドイツ体操祭とも区別したうえで<sup>25)</sup>、トゥルネンとスポーツと遊戯が共通の平和的な競技大会を通してドイツ各地で開催される国民祝祭(国民の記念日に開催される競技大会)として計画することを“スローガン”として示すようになった<sup>26)</sup>。シュミットは対内的にはトゥルネンとスポーツが和解するように呼びかけ<sup>27)</sup>、対外的には厳粛な雰囲気包まれた祖国愛として展開した<sup>28)</sup>。

## 3) ドイツ・オリンピアに対する偏見の原因

シュミットのドイツ・オリンピア計画はすぐに“たんなるフランス主導のオリンピック競技大会の代替”という批判的な見方によって反動的に作用してしまった。こうした原因はクーベルタンの模倣、補充、また、ただの気晴らしとして考案したという偏見に基づいていた<sup>29)</sup>。シュミットの努力とは裏腹に「ZAは何を混ぜ合わせたいのか」という批判的な意見が相次いだ<sup>30)</sup>。それに対するシュミットの弁明は以下のとおりである。

こうした事柄を知らされたのはどのような経緯かというと、それは、ZAの協議が偶然のきっかけであった。その協議はいかにしてZAの理念を引き続き促進するのか、という内容であった。しかしながら、そのような理念はいまだ確かな基盤がなく、また、アテネオリンピック競技大会とかわる理念でもあった。いずれにせよ、こうしたことは問題として表面化してくるであろう。ZAには十分に自らの

課題を遂行する権利がある。また、その解決策をDTに委ねてはいけない。もし仮にDTが自発的に課題を引き受けたとしても、既存の対立状態では、おそらくスポーツ側を招き入れることは解決不可能な困難さに直面するであろう。そうした状況において、必要に応じて争いを和解に導くことが仲介役としてのZAの存在意義である。<sup>31)</sup>

しかしながら、争いは引き続き行われ、両者の間では公式的に非妥協的な状態が続いた。シュミットは再度以下のように明確に確信した。

ZAのこれまでのドイツ民族祭(deutsches Volksfest)促進活動の経緯は活動領域を超えて行われてきたものではなく、国民祝祭を手本としてドイツ・オリンピアの創設に尽力を注いできた。とりわけ、良いことや正しいことはここでは度外視しておく。すなわち、両者が互いにとって最初のきっかけとなるかどうかはいつでもよく、実際に互いが権利を持ち合わせているのなら、まずはそれを受け入れるかどうかということである。この点に関してこれ以上の話し合いは無駄話となる。<sup>32)</sup>

シュミットの以上の発言にもかかわらず、偏見を阻止することはできなかった。そして、ドイツにおいて長く執拗なまでにトゥルネンとスポーツの抗争は維持された。1896年初頭には国際オリンピック競技大会の参加を論むW・ゲブハルト(W. Gebhardt)の出版物にも偏見が確認できる<sup>33)</sup>。さらには1930年にも再度説明されるべき命題として著された論文を確認することができる<sup>34)</sup>。

最終的にはギリシア側がドイツとの外交上重要な人物をシェンケンドルフとみなしていたこと、すなわち、1895年6月11日にZAの代表者であるシェンケンドルフ宛にアテネのオリンピック組織委員会から公式の招待状が届いていたが、DTへの招待状はその約半年後の12月3日に届いたことや、また、DTはクーベルタンによる1894年の会議の際に意図的に遅れて招待した経緯などを理由に<sup>35)</sup>、アテネのオリンピック委員会に対して不参加を表明した<sup>36)</sup>。そして、DTは12月18日に不参加の決議を行った。他方、以前にDTに拒否された「ドイツのオリンピック参加委員会」設立を試みたゲブハルトは12月13日に再度結成を呼び掛け、ベルリン駐在のギリシア大使館員などの協力を得て結成に至った<sup>37)</sup>。ZAの場合は、不参加の決議はすでに6月30日に決定されていたが、正式には12月16日に不参加の回答を示した。それゆえに、シェンケンドルフも参加を思いとどまった。そして、ZAのハノー

ファーの役員会議の際にシュミットが以前から提案していたドイツ・オリンピア<sup>38)</sup>の実施に向けられたのである<sup>39)</sup>。

### 3. ライトによるドイツ・オリンピア計画の発生とその内容

#### 1) ドイツ・オリンピア計画の発生

シェンケンドルフはハノーファーのZA役員会議に従って、1896年1月19日にベルリンにある公務員宿舎に6人の参加者(そのうち新しいメンバー3人)を招待し、会議を開いた。メンバーは、ZAのシェンケンドルフ、ライト、H・G・ヴェーバー(H. G. Weber)とDTのゲッツ、H・リュール(H. Rühl)、シュミットの6人によって構成された<sup>40)</sup>。この「6者委員会」はシェンケンドルフの提案によって開催された<sup>41)</sup>。その会議の懸案事項は次の2点にあった。1つはドイツ・オリンピア開催計画であり、2つめはゲッツによって提案された名称をめぐる問題であった。つまり、その名称を「ドイツ競技国民大会(Nationaltag für deutsche Kampfspiel)」とすべきであるとされた<sup>42)</sup>。

シュミットの計画のこれまでの課題であった計画案の作成をシェンケンドルフは遅くともこの会議の中でまとめ上げるために<sup>43)</sup>、会議の冒頭で“この祝祭はいかなる価値と本質、そしていかなる構成によって成し得るのか”、という提案と“10項目以内の実施規定の作成”について説明を行った<sup>44)</sup>。

会議の交渉のなかでは、K・コッホ(K. Koch)が提案した、祝祭の中に男子合唱団と軍人協会(Kriegsverein)を招き入れるべきであるという案も出された。それに対しシュミットは、祝祭は身体運動を伴う競技に制限すべきであるという立場をとっていた。ただし、祝祭を盛り上げるものとして男子合唱団を招き入れることは可能であるとした。その他の点ではドイツ・オリンピアをDT所属の選抜者の参加と、加えて、DT以外の身体訓練を行っている者を参加させることに意味を見出していた。それは、シュミットにとってわずかではあるが、“試み”の始まりであった<sup>45)</sup>。

シェンケンドルフは個々に決められた事項に異論なく決議を得ることができた<sup>46)</sup>。この議論は結果として暫定的ではあるが報告書をまとめ上げることに到達した。しかしながら、最終的にこの草案は1896年3月末に受理されないことが決定された。そして、その仕事はライトに託され、ライトは独自に編集に取り組んでいったのである<sup>47)</sup>。

#### 2) ライトによるドイツ・オリンピア計画の内容

ライトは1870/71に勃発した普仏戦争時に志願兵として、1894年からはハノーファーにあるリアルシュー

レの校長として従事し、1875年以前にはギムナジウムの教員として、また副校長として働いていた。ZA設立の際には事務局長として精力的に力を注いだ人物である。ライトは決して容易とはいえない報告書の作成という課題を任された。すなわち、ZAとDTのメンバーからなる6者委員会によって準備されるはずだった国民祝祭の開催が危ういものとなったからである。ライトはそれでも努力した。それは、他の5人の委員の草案をまとめるということではなく、多方面から来る手紙による批判に対応するといったことにも努めなければならなかった<sup>48)</sup>。しかし、ライトは32頁にわたって書かれた12項目の体系的な規則を書き上げた。そして1896年4月に報告書を出版するまでに至った。その報告書はしっかりと内容かつ感動させられるものであり、厳かな報告書であった<sup>49)</sup>。しかし、驚きとともに反発も招いた。つまり、この計画はあまりに“美化”されており、客観的な判断力と現実的な考え方が不足しているという指摘を受けたからである。それゆえ、リユールはその計画を批判した<sup>50)</sup>。また、ライトが確固たる「過度の期待」を確信しており、とりわけ身体運動を身近に感じていない人々によって、おそらく挑発的に異論を唱えられるであろう、という点において彼を非難した<sup>51)</sup>。他方では、ライトは計画や個々の事項を冷静に調査しており、実施可能な報告書として見なされていた<sup>52)</sup>。

とりわけドイツ・オリンピアと新しい国民祝祭のためにドイツの国家理念を結びつけることと、さらに、そこから派生した単独の愛国的な国家市民(Staatsbürger)の養成というライト独自の考えは維持された。

報告書の第1節では多方面にわたって“平和的調和”のシンボルとしての“オリンピア”を模範とした神話について記載されている。

第5節においては(1節から4節までと6節から12節までの形式上の小休止として)一頁にわたって、空想上の理想的な人物とドイツ皇帝の力強さを示す賛歌が記載されている。そして、次の第7節、第8節が第一の“重要ポイント”と思われる<sup>53)</sup>。なぜなら、第7節と8節では数多くの歴史的回想品を取り上げることによって熱狂的な愛国心を支えているからである。

この報告書の最終節である第12節では“結びに”と題して第二の“重要ポイント”が示されている。すなわち、計画されたドイツ競技国民大会を支援し、それに伴って“国内・外にゲルマンの子としてのドイツの統一と強さを備えさせる重要な計画”の完成を支援する愛国者としての活動をドイツ民族(Volk)と次の世代に呼びかける、という意味を付したホフマン・フェーラーズレーベンの賛歌である<sup>54)</sup>。

最も重要で根本的な課題と新しい祝祭の開催と実施の詳細はベルリンにおいて1月19日の会議に決定された次に引用する事項に応じてこの報告書に引用することであった<sup>55)</sup>。

- (1) ライトによって区分された次の身体運動が中心となって行われなければならない<sup>56)</sup>。  
 ートゥルネン運動(跳ぶ、走る、投げる、格闘技、フェンシング)  
 ー民族、青少年遊戯  
 ー自転車  
 ー水泳  
 ーボート
- (2) 最も計画的に遂行され、重要な位置づけとなる祝祭を考えている。そのためには、以前からのトゥルネンのような内容でもなければ、スポーツのように一面的で記録追求主義的な内容を取り入れることもできない<sup>57)</sup>。つまり、ひとえに調和に満たされて形成された競技大会は決められた選出方法によって決定される。しかし、具体的な計画のための詳細な導入についてはまだ公表できない。さらに入念にかつ詳細に熟慮する必要がある<sup>58)</sup>。
- (3) 他方では、3つの大きな組織(DT, ZA, さらにまだ組織されてはいない各種スポーツ連盟)もしくは、異なるそれらの“方針”を“それぞれの特性を十分に活かした”上で共通の競技場における平和的な競技大会を如何にして“組み立てる”のか、という明らかに困難な課題もある<sup>59)</sup>。
- (4) 競技を本職としている選手は基本的には参加できない。
- (5) 芸術家の参加は祝祭を彩るためにも参加されるべきである<sup>60)</sup>。
- (6) 第1回国民祝祭はライプツィヒにおいて1900年の7月中に開催されるべきである<sup>61)</sup>。しかし、開催場所は未確定である。祝祭としての競技大会は数日、おそらく1週間はかかる。そのため、以前に祭典が挙行された北西ドイツのプライセ低地において開催されるべきである<sup>62)</sup>。
- (7) 祝祭の名称は最終的には決定されていない。現時点では“ドイツ競技(Kampfspiele)国民大会”以外に“ドイツ競技大会(Wettkämpfe)場”、“ドイツ競技大会(Deutsche Kampfspiele)”、“ドイツ競技祝祭”などが提案されている。自身(ライト;括弧内筆者)は“全ドイツ競技大会”と“ドイツ祝祭”を候補に付け加える<sup>63)</sup>。
- (8) 如何にして定期的に開催するのかという議論は

いまだ検討中である。今のところ3年から5年に一度開催するという意見がある<sup>64)</sup>。

ここで、ライトとシュミットの計画を比較するならば、シュミットの計画は当然のことではあるが、ただ各組織と協力して競技を行うことに重点を置いていたのに対して、ライトの場合は祖国に対する信念や考え方を個々の競技者に求めているように思われる。これに関して報告書には、

参加者に求めるのはただ一点、この大会はこのドイツ国内の地において完全なるドイツ的な考えのもとで開催することを前提条件としているということである。<sup>65)</sup>

この祝祭への招待はそのような観点に応じた内容として解釈できよう。また、“ドイツの民族性の表明”によって過剰なまでの美化と荘重を求めているように思われる。すなわち、

我々は全ドイツ民族をドイツ・オリンピアに招く。演技においてもまた、ドイツの民族性の表明と継続的なドイツ国家の復活を表明するドイツ民族のみを招待する。そうした観点に基づいて我々は完全なるドイツ国民の祝祭を構成すべきであるし、しなければならぬ。また、各人にとって真のドイツが喜びに満ちたものでなければならぬ。<sup>66)</sup>

このように記載された報告書ではあったが、“この計画は実施可能なのだろうか、実施すべきなのだろうか”という疑問もまた露呈していた。

#### 4. シェンケンドルフによるドイツ・オリンピア計画の発生とその内容

##### 1) ドイツ・オリンピア計画の発生

ライトの草案が提出されたことによって、引き続きDTとの共同作業に関する6者会議の作業成果がまるで十分な計画の基盤を提供したかのように見えるが、それはあくまでも、協議資格のある三つの中心的な当該組織の代表者（諸連盟が実現可能かつ満足のいく限り、身近に連絡を取り合うために）がこの計画に関する協議を運営するために、シェンケンドルフが尽力したからであった。

シェンケンドルフはZAの会長として（事務局長とともに）1896年5月28日、公式な書簡によってドイツ皇帝であり国王であるヴィルヘルム二世へドイツ・オリンピアのことを知らせた。

皇帝がその返事を思いとどまっている時、およそ

一ヶ月半後の1896年7月9日に宗教省のヴェイラオフ代理人による批評された書簡が政府から届いた。その内容は、

“全ドイツ祝祭”、または“ドイツ競技国民大会”と名付けられたその計画は、ゲルリッツ出身のシェンケンドルフ議員率いるZAの弛まぬ努力によって新たに計画され、とりわけ、如何にして独自に人気を博すかということを探索されている。

この祝祭が完全に愛国的な信念に包まれた事柄であること、また祝祭によって身体運動の養成が民族の慣習（Volkssitte）となるべきであり、国民意識の高揚をさせる祝祭となる有益な進展を望んでいることは私にとって疑う余地もない。しかし、ミュンヘンにおける交渉の経過を待たなければならないであろう。なぜならば、第一に経験豊かなドイツトゥルネンの代表者とまったく性質の異なるスポーツの代表者とを調和させるやり方が妥当かどうか、その交渉によって明らかになると考えているからである。それはトゥルネン側との予備交渉の際に不安要素として主張されていた。その不安要素の一つには、既存の国民大会としてのドイツ体操祭に損害を与えるのではないかということと学校やフェラインにおけるトゥルネンの有益な活動にそもそも熱狂的な競争心をともなったスポーツを用いることに強く注意を促しており、また個人の最高記録の追求の促進が脅威となるであろう、ということであった。

他方では、まさに新たな時代にはスポーツ的な活動において個人がより国際的に成果を得ることが出来る選抜選手の代表者をめぐって、おそらくZAはDTと対立を引き起こし、おそらく意図的に促進させるであろうということは明白である。この時代における共同作業のための絶え間ない和解に対して期待すると同時に、シェンケンドルフの筆跡と言葉のうちに和解をもたらそうという大変な努力が見受けられた。<sup>67)</sup>

しかしながら、さらに取り上げられ公表された課題に関して、書簡に記されているいわゆるDTのミュンヘン会議において本質的な決定には至らず、1896年7月20日にDTの総会がケルンで開かれた際に決定した。ミュンヘンにおける決定事項はDTに応じて断念しなければならなかった<sup>68)</sup>。

そして、ケルンの会議では今までのドイツ体操祭に加えてドイツ・オリンピア計画を成し遂げるという最終的かつ明確なDTの同意には至らず、技術分科会の議案のみが採決された。そして、“好意的に検討”するという形式的な約束をただけであった<sup>69)</sup>。

シェンケンドルフにとってこれまで計画してきた1900年の国民祝祭開催をできるだけ放棄せずに留まるか、放棄するべきかどうかという課題に直面していた。とりわけ、ZAのメンバーの数人がすでに強く反対していた<sup>70)</sup>。

それでもなお、シェンケンドルフはあきらめなかった。それどころかむしろ、次に予定しているZA役員のカッセル会議(1896年10月18, 19日)において、“自らの考えを強力に支持するシェンケンドルフ案”<sup>71)</sup>が打ち出された。その新たな目的は半ば強引に決議された。

1897年1月2日、シェンケンドルフはカッセルの決議の考えに基づいた新しい報告書を公表した<sup>72)</sup>。続く1月31日、ベルリンの帝国議会議会館においてシェンケンドルフによって準備された大きな会議が開かれた。その会議では改訂された新しい計画の実施や遂行、宣伝活動といった現実的な第一段階に関する課題が取り上げられた。シェンケンドルフが追い求めてきた半ば強引なその新しい目的は、すなわち、“大々的な”ドイツ国民祝祭であった。その“大きな目的”の意味するところはこれまでに提出されたライトの計画を調整し改訂された内容に過ぎず、DTのゲッツはその計画を熟慮した上で、翌日には、シェンケンドルフによる引き続きの共同作業の提案を拒否することを決定した<sup>73)</sup>。

しかし、そうしたゲッツの撤退にもかかわらず、当分はあきらめることはなく新しい計画に全力を尽くした。1897年1月2日、内閣官房長官であるルカヌ博士へ送った書簡では“成功に満たされることを信じて”計画の遂行をやっている意思があったことが述べられていた<sup>74)</sup>。

## 2) シェンケンドルフによるドイツ・オリンピック計画の内容

シェンケンドルフの報告書と並んで、次に取り上げるべきことは第一にベルリンで開かれた会議の内容をさらに考慮することである。なぜなら、そこで考えられたことと報告書とが適応しており、また、会議では報告書がたびたび引き合いに出されているからである<sup>75)</sup>。

報告書の序文にあたる第1節(ドイツ国民祝祭計画活動と題された)においてすでにシェンケンドルフはその報告書を読んだ者は賢明に理解すると認識していた。つまり、この報告書が1895年10月にZA役員によるハノーファー会議において提案された“ドイツ・オリンピック”計画の“誕生”としてではなく、また、1896年1月の6者会議において構成された計画案でもなく、1896年10月のカッセル会議以降の新しい計画

を示しているということを指摘しておかねばならないであろう。

とは言え、その計画された企画に関して、ライトの報告書と1896年1月19日をもっとも重要な日と名付けたが、新たな計画が過去の計画に由来しているという印象はむしろ示してはいなかった。

- (1) これまでの全計画はただ、計画に要した期間としてのみ考慮する<sup>76)</sup>。
- (2) 適切な祝祭の創設はいまここから達成される<sup>77)</sup>。

シェンケンドルフはZAの当初の計画、社会性、遊戯促進そして健康促進へのZAの関与と(そこから発生した)ドイツ祝祭再考に言及した。そしてそれに引き続き第2節が報告書の主要、中核部分の始まりとなっている。ヤーンを多く引用したのち、E. M. アルント(E. M. Arndt)について言及している。

過去の時代のように民族の祭典を再開することが重要であり、そのためにはヤーンの時代精神を改良し模範的な開催内容とすることが重要である。すべての民族に幸福をもたらすような祖国の各地においてそのような民族祝祭が定期的に開催されなければならない。<sup>78)</sup>

つまり、これまでのZAの計画を非難したのである。それは、ドイツ・オリンピアが(木のごとく)民衆(Volk)によって“下から”徐々に成長し、またそうならなければならない、ということ considering しておらず、“上から”命じられて“成し遂げる”は無益(schlecht)であり、上から命じられた民族祝祭は民族祝祭とは言えず、そのような祝祭には異論を唱える<sup>79)</sup>、ということであった。この計画であれば、“直接的な見解として活気のある模範としてのドイツ国民祝祭を深部にまでわたって促進させること”ができると考えていた。すなわち、シェンケンドルフは祝祭を広く普及させるために“下から”ということを考慮した点を基底としていることを明確にしている。また、それによって、二重戦略という方法に至ったということでもある。

彼の改革の基本方針は“ドイツ民族の新たな文化の発展”を関連付けさせるとであった。そのために“激しい不安/危惧”、“不穩”、“崩壊過程”、“退廃/逸脱”、“国威発揚の衰退”、“内なる敵”というキーワードとともに呼びかけ、とりわけ市民的価値観と慣習(Bürger-tugend und -sitte)や国民統一への思い、全ドイツという考え方の育成/強化/安定化のために創生された活力のある思潮を未来に見据えていた<sup>80)</sup>。

次の4つの項目(4つの観点からなる要望)<sup>81)</sup>によっ

でシェンケンドルフは平和をもたらすものとして位置付けている<sup>82)</sup>。

- (1) 蘇生、改良、維持を根源とした地方における民族祝祭の提案
- (2) 身体育成の鍛錬、民族の慣習としての身体運動の推進をとりわけ民衆に拡大させた、それら一般的发展の導入の提案
- (3) 社会的信念の保護と育成としての市民慣習を呼び覚ますことによって均衡する社会の形成を図る。
- (4) ドイツの統一的な考えを安定させる国威発揚の強化

“大々的な国民祝祭”（シェンケンドルフいわく、新しいドイツの理想像）は総じて各地の民族祝祭や国民意識の高揚やドイツ文化の模範的機能を果たすべきである、と考えていた<sup>83)</sup>。享楽欲と利己心、“あらゆる方法による身体運動と対極にある怠惰と無関心”そして世間一般に広まる息詰まる雰囲気<sup>84)</sup>をシェンケンドルフは自らの信念を通して克服することができると信じていたし、他方、それらによって一部の勝手気ままな功名心からなる“野蛮で役に立たず閉鎖的な”スポーツに規律を教え、国民のあるべき“姿と本質（Form und Wesen）”を形成させなければならぬと考えていた<sup>85)</sup>。シェンケンドルフいわく“第一にそれを成し遂げることに着手することが急務である”としている<sup>86)</sup>。祝祭の内容とプログラムにかかわる本質的なことは明白であった<sup>87)</sup>。つまり、中心的な課題はそれゆえに国内に向けられた厳粛な式辞によって表明されなければならなかった。

「第1回ドイツ国民祝祭準備のための企画運営」と題された内容を最終的には第3節において指摘し、実用的な提案がなされている。

—このドイツ国民祝祭の準備と導入を完全に自立した企画運営という新たなやり方で成功させるにあたってZAにはすでに当該国民祝祭を進行する権限はなく（取り決めであるにせよ）、ただ、手助けをするだけである。

—中心となる幹部は、ミュンヘン会議以来存続している21人の委員によって代表され、将来的には「ドイツ国民祝祭委員会」<sup>88)</sup>によって理事会（当面は36人の委員（122省略）、幹部（役員と分科会と委員会を形成して祝祭の準備を進める8人の委員）といわゆる“大委員会”（ドイツ国民祝祭計画の愛好家、促進者、後援者）を結成する。

—国民祝祭（祝祭期間の5日間）は身体能力の上演や芸術との共同作業に基づいて“装飾”としての歌、

音楽、民族劇によって“活気”づけられるべきである<sup>89)</sup>。ただし、上演に伴う競争は予定していない。

—国民祝祭が政治政党のためにあるのでもなければ、ただ身体能力を高めるためだけにあるのでもない。上述した全体的な目的を追求することが公式上の方針である<sup>90)</sup>。

—生徒は参加できない<sup>91)</sup>。

—祝祭は当面は1900年に制限されるが、“必要となれば”、その後“5年おき”に開催することを考えている。

—開催場所としてはライプツィヒ、ベルリン、もしくはその他の場所にするべきか課題となっている。

—開催時期は全員一致して9月初旬が考えられている。

そして、第4節の結語ではシェンケンドルフによる、

国内外にいる全ドイツの祖国の友がこの時代の退廃と成熟について熟慮し、その対策の一つとして言葉と行動によって統一的な理念をともなった国民祝祭を形成すること。<sup>92)</sup>

というアピールで締めくくられた。シェンケンドルフがなぜこの祝祭を背負わざるを得なかったのか、それも強制的であったのかどうか懐疑的であるが、たとえば、新しい祝祭計画の創設日に説明した1897年1月31日のベルリンでの会議におけるシェンケンドルフの声明から聞き取ることができる。

私は、この計画を実施するにあたって期待を込めた希望と心の奥底まで不安にさせることを交互に示したことはない、ということを表明する。計画の機運が熟したり実施の困難さが表れるほど、波が高まったり、静まったりとする傾向は増大する。<sup>93)</sup>

次のシェンケンドルフの発言も重要と思われる。

皆さんもご承知の通り、昨年アテネにおいて開催された国際オリンピックが1900年にパリで開催される。知るところによるとフランスはすでに、国際オリンピックのために100万ゲルトマルクを用意していると聞いている。<sup>94)</sup>

この隣国に対する考えが彼をドイツ・オリンピック実施に駆り立てた動機だったのだろうか。つまり、1900年開催に向けて一人で立ち向かおうとはせずにいたと考えられる。報告書においてすでにそのことを代替するものとして次のように記載されている。



如何にして引き続きこの計画が発展し続けていくことができるのだろうか。すなわち、この計画が勢いよく成功するのだろうか、まず、将来にわたって残されていくのだろうか、特に、この計画の実施が可能となるために国民の裕福なサークルが熱狂的かつ献身的に手を差し伸べるかどうかということである。一度そうした状況を打ち立てることによって、ドイツ民族の課題となっているこの祖国の目的はこれ以上消え去ることはなくなるであろう<sup>95)</sup>。

### 3) シェンケンドルフ計画の失敗とその後の進展に関する若干の概要

1898年3月28日、ドイツ国民祝祭委員会会議の決議の2日前の内閣官房長官であるルカス博士への報告に祝祭開催場所として選ばれたリュエデスハイムが可決したということがシェンケンドルフの書簡に書かれている<sup>96)</sup>。開催地はリュエデスハイムのニーダーヴァルトに選ばれた。開催場所の構想に関する草案は提出されており<sup>97)</sup>、公布されていた<sup>98)</sup>。とりわけ、スポーツ競技に関する詳細な計画はすでに仕上げられていた<sup>99)</sup>。

また、同年7月7日、1900年開催予定のドイツ国民祝祭場所に関する委員会が設立された。その委員会は97年5月にクルト・ベッカート会長（リュエデスハイム）のもとニーダーヴァルト国民祝祭場に関するライン川地方の委員会がもととなって、国民記念碑が建立されている場所で国民祝祭を開催すべく委員会が設置された<sup>100)</sup>。しかしながら、シェンケンドルフの計画はさまざまな理由から最終的には実現されなかった<sup>101)</sup>。

1898年12月、ドイツ国民祝祭帝国委員会はこれまで成果を収めてきた道のりが期待していた目的へと導くことができなくなったということと<sup>102)</sup>1900年開催予定だったこの壮大なドイツ民族祭が財政上の見込みがないであろう、ということをも認めざる得なくなった<sup>103)</sup>。それゆえに、シェンケンドルフによってあらかじめ計画された2つの計略を次の時代に託すために、来るべき年まで思いとどまることになった。すなわち、一方では新たに祖国の祝祭における遊戯に関する帝国協会（Reichsverein für vaterländische Festspiele）を設立し、“国内におけるあらゆる身体運動の召喚のもと”新たに開設された地方の委員会と地方の祖國的な祝祭の援助をともなって“下から”自律的に民衆（Volk）が毎年同じ場所で帝国を祝すための遊戯と真の民族性と国民意識の強化が発生できるように努力していった。

他方では、中心的な目的である国民祝祭が“地方の冠祝祭”として新たな所定の期日に開催された<sup>104)</sup>。それは、以下に示すとおりである。

- (1) 1899年にすでにケルン<sup>105)</sup>やドレスデン<sup>106)</sup>では新たに作られた“祖國的な祝祭における遊戯”が開催された。
- (2) ブラオンシュヴァイクやその他のいくつかの地方においてこれまでのように“セダン祝祭”と命名された祝祭における遊戯が開始された<sup>107)</sup>。
- (3) 翌年、これらの地方による祖國的な祝祭における遊戯の導入と開催に対する尽力が発展の一端を担った。
- (4) 最終的に「国民祝祭としてのドイツ競技大会」は1922年（ベルリン）<sup>108)</sup>、1926年（ケルン）<sup>109)</sup>、1930年（ブレスラウオ）<sup>110)</sup>、1934年（ニュルンベルク）<sup>111)</sup>へと至った。
- (5) 1913年2月23日ライプツィヒでドイツ競技会連盟を創設させたのち、“輝かしい1870/71戦争の50周年記念”<sup>112)</sup>として1920年にライプツィヒの諸国民戦勝記念碑において第1回ドイツ競技大会を導入するという本来の願いをもっていたが、第一次世界大戦開戦によって計画は妨げられた。

## 5. まとめと今後の展望

本稿はトゥルネン＝スポーツ抗争に関する一考察として19世紀後半にみられた両者の対立という視点に加え、和解への道を模索し続けたZAのメンバーに注目し、とりわけ、オリンピック競技大会への参加をめぐる議論としてシュミット、ライト、シェンケンドルフによる国民祝祭としてのドイツ・オリンピック計画の発生及び展開について明らかにしようとしたものである。

考察の結果、シュミットの場合、国民祝祭としてのドイツ・オリンピックというよりもむしろ、国際オリンピック競技大会への参加をめぐる政治的力学とトゥルネンとスポーツの和解を目論む中で展開されたドイツ・オリンピック計画であったと考えられる。また、トゥルネン、スポーツに加え、遊戯を含めたそれらの平和的な共同開催を望んでいたことが明らかとなった。ライトの場合は、トゥルネンとスポーツが平和のうちに共同に開催できることを望むも、その困難な課題を受け止めたうえで、各種目の競技大会を計画に据えつつ、より敬虔主義と理想主義を掲げた国民祝祭としてのドイツ・オリンピックを目論んでいたと考えられる。シェンケンドルフの場合は、前者のいずれにも当てはまらない“スケールの大きい”ドイツ・オリンピックを“下から”の民衆によって創設される国民祝祭としてのドイツ・オリンピックを望んでいたわけであるが、結果的には財政上の問題が絡み、計画は失敗に終わる。計画の失敗はシェンケンドルフのみならず、シュミット、ライトにおいても同様の結果となった。しかしながら、

どの計画にもトゥルネンとスポーツとが共同で開催することを望む報告書であったことがあきらかとなったが、今後考察されるべき論点も残されている。一つには、シェンケンドルフが開催場所として候補に挙げていたリュエデスハイムのニーダーヴァルトやライプツィヒ諸国民戦勝記念碑広場において具体的にどのような計画を目論んでいたのか明らかにする必要がある。いずれの場所も、国民的記念碑はトゥルネンが祝祭を行う際の舞台装置となっていたのであるが、トゥルネンとスポーツが共同で開催することを望むドイツ・オリンピアにおいてもまた国民的記念碑のある場所が重要であったと考えられる。トゥルネンとスポーツとの対立から和解への道を歩む過程を示唆しているといえよう。二つめにはシェンケンドルフが理想に掲げていた“下から”のドイツ・オリンピアの創設は如何なることを意味していたのかという課題である。他方では国防力を高めることを目的として国家制度とかかわっていたにもかかわらず、“下から”の創設を如何にして達成しようと考えていたのか検討の余地が残るのである。今後の課題である。

## 6. 注および文献

- 1) E. Neuendorff, *Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18 Jahrhunderts bis zur Gegenwart*, Dresden o. J., Bd. IV, 1936, S. 473
- 2) 波多腰克見, 国民祝祭としてのドイツ・オリンピア—セダン祝祭から 1922 年ドイツ競技大会開催に至る経緯—, *日本体育大学紀要*, 38-2 号, p. 76
- 3) C. Diem, *Friede zwischen Turnen und Sport*, Leipzig und Berlin, 1914
- 4) 1895 年 6 月 12 日付のフランスの「ジル・ブラース Gil Blas」紙に掲載されたクーベルタンのインタビュー記事。その記事は「非常遅れてから—おそらく故意に一招待されたドイツだけがこの会議に参加することを拒否した。この不参加は話題にはあがったが、しかし、誰の不満も呼び起こすことはなかった」と報じた。この記事はドイツ側のみならず第 1 回大会準備委員会のあいだにも波紋をよび、クーベルタンは同紙に掲載されたインタビュー内容の取り消し声明をおこなっているが、体育史上「ジル・ブラース事件 Gil-Blas-Affäre」といわれるその後の騒動を止めることができなかった。Vgl., K.Lennartz, *Geschichte des Deutschen Reichsausschusses für Olympischen Spiele*, Heft 1, Bonn, 1981, S.63-68
- 5) Vgl., F. A. Schmidt, “Die Wiederbelegung der olympischen Spiele nebst zeitgemäßen Betrachtung über Turnen und Sport”, in: *Deutsche Turn-Zeitung* 40, 43-46, 1895, S. 937-939, S. 961-965, S. 985-988, S. 1009-1012
- 6) Vgl., K. Lennartz, ebenda
- 7) ZA の名称は当初「民族」と「青少年」とが前後逆に記載されていた。Vgl. F. A. Schmidt, *Fünfund-*
- zwanzig jahre Zentralausschuß—ein Rückblick und eine Ausschau, in: *Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele* 25, 1916
- 8) Schmidt, 1895, S. 962-963
- 9) Schmidt, 1895, S. 350
- 10) Vgl., Schmidt, ebenda
- 11) F. A. Schmidt, *Der Nationaltag für deutsche Kampfsportspiele und die deutschen Turnfeste*, in: *Deutsche Turn-Zeitung* 41, 18-21, 1896 a, S. 350
- 12) Vgl., Schmidt, ebenda
- 13) 当時 E・クルティウス, O・H・イエーガー, A・ベッティヒャーらによって古代ギリシア人による体操やオリンピアに関する出版物が著された。Vgl., W. Gebhardt, *Soll Deutschland sich an den Olympischen Spielen beteiligen? Ein Mahnruf an die deutschen Turner und Sports männer*, Berlin, 1896, S. 6
- 14) Schmidt, 1895, S. 963
- 15) Schmidt, 1896 a, S. 350
- 16) シュミットによるこの「とっさの名案」には前提となる条件がないわけでもなかった。ZA が特に全国の各都市において入念に手はずを整えることを要請していた各地の民族祝祭 (Volksfeste) (*Zeitschrift für Turnen und Jugendspiele* 4, 1895/96 7, S. 102 f. 参照) による 1895 年 9 月 2 日の祝祭日 (セダン戦勝記念祝祭 25 周年記念) が近づいていたことや、その他には 1894 年に公募し 1894 年 10 月 6 日に ZA の小委員会であり、シュミットが委員長の「民族祝祭委員会」によって文学コンクールが行われた。その際に全ドイツ民族祝祭もしくはドイツ国内オリンピアに対する 42 作品の理念が取り上げられた。その中でもそのコンクールに優勝したのは優秀な若手教員であり後に高校の校長を務めた E・ヴィッテ博士 (ブラオンシュヴァイク出身) であったが、彼がサントペテルブルグで仕事をしていた時に考案された理念であった。題目は「如何にしてこの時代に適したドイツ民族のための公的祝祭の再構築と真の民族祝祭は開催可能となるのか」であった。Vgl., H. Raydt, *Mitteilungen über beachtenswerte Anregungen aus einigen anderen eingesandten Preisarbeiten (des literarischen Wettbewerbs des ZA in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 5)*, 1896 a, S. 34 u. E. Witte, *Wie sind die öffentlichen Feste des deutschen Volkes zeitgemäß zu reformieren und zu wahren Volksfesten zu gestalten*, in: *Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele* 5, 1896, S. 18 f.
- 17) Vgl., Schmidt, 1896 a, S. 350; シュミットは次のように述べている。「私は、これまで以上にドイツの青少年が元気になるために力を尽くし、身体運動と遊戯のあらゆる方法によって定期的に競技大会が開催されるであろうということを公告する。すなわち、トゥルネンとスポーツがお互いに歩み寄り共通の祖国を持ち、平和的な競争によって和解への道を探すこと、それこそが国内において祝祭を開催によって可能となるのであり、決して国際的に成し遂げられるものではない！」
- 18) Schmidt, ebenda
- 19) Schmidt, ebenda
- 20) Vgl., Schmidt, 1896 a, S. 350

- 21) F. A. Schmidt, 1895, S. 1011–1012
- 22) Schmidt, S. 1012
- 23) Vgl., Schmidt, 1895
- 24) Vgl., Schmidt, 1896 a, S. 387
- 25) Vgl., Schmidt, 1896 a, S. 389
- 26) Vgl., Schmidt, 1895, S. 1011; 大かにまとめられた立案を1897年の後半にシュミットが綿密に計画した。F. A. Schmidt, Die Wettkämpfe und Vorführungen von Leibesübungen bei Gelegenheit des deutschen Nationalfestes im Jahre 1900, in: Deutsche Nationalfeste, Schriften und Mitteilungen des Ausschusses (7 Hefte), München/Leipzig, 1897. その計画に対してリユールは批判している。H. Rühl, Der Nationalfest und die Deutsche Turnerschaft. Bericht über die statgefundenen amtlichen Verhandlungen, in: Deutsche Turn-Zeitung 44, 1899, S. 67–69
- 27) F. A. Schmidt, Ein deutsche-nationales Olympia, in: in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 5, 1896 b, S. 52
- 28) Schmidt, ebenda
- 29) シュミットは次のように説明している。Vgl. Schmidt, 1896 b, S. 56; 「いくつかの地区から国内オリンピックは国際オリンピックの代替として創設されるべきであるという見解が出ているが、それは適切ではない。現状ではこの両方の計画は一致しているが、まったく別の視点に基づいている。」
- 30) 1895年12月13日のベルリンにおける会議においてすでにエギィディ氏はこの疑問に関するZAの権限に対し異論を唱えた。Zeitschrift für Turnen und Jugendspiel 4, 1895/96, 20, S. 318
- 31) Schmidt, 1896 a, S. 350
- 32) Schmidt, 1896 a, S. 351
- 33) Gebhart, 1896, S. 93
- 34) C. Diem, Zum Bestande der DeutschenKampfspile, in: Blätter für Volksgesundheit und Volkskraft 18, 1930, 11 (v. 18. März)
- 35) Vgl., Schmidt, 1895, S. 962
- 36) ZAとDTによる報道機関への介入 Vgl., Chr. Schroeder, Die Rolle des Zentralausschusses für Volks- und Jugendspiele (1891–1922) als ‘Führerorganisation’ auf dem Gebiete der Körperkultur, Diss. Leipzig, 1967, S. 72 f.
- 37) Vgl., Gebhart
- 38) Vgl., H. Raydt, Die Vorstandssitzung am 4. und 5. Oktober 1895 zu hannover, in: in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 5, 1896 b, S. 307; Rühl, S. 9
- 39) Vgl., Lennartz, S. 82 f.
- 40) Rühl, S. 10
- 41) Rühl, S. 9 f.
- 42) Schmidt, 1896 a, S. 349
- 43) Schroeder, S. 69
- 44) Rühl, S. 9
- 45) Rühl, S. 10
- 46) Rühl, ebenda
- 47) Rühl, S. 27
- 48) Rühl, ebenda
- 49) H. Raydt, Nationaltag für deutsche Kampfspiele (Deutsch-nationales Olympia), Leipzig, 1896 c
- 50) Rühl, S. 27
- 51) Rühl, S. 26
- 52) Rühl, ebenda, S. 25
- 53) Vgl., Raydt, 1896 c, S. 16
- 54) Raydt, 1896 c, S. 32
- 55) Vgl., Rühl, S. 10
- 56) Raydt, 1896 c, S. 17
- 57) Raydt, 1896 c, S. 18 f.
- 58) Vgl., Raydt, 1896 c, S. 16
- 59) Vgl., Raydt, 1896 c, S. 9 u. 17
- 60) Vgl., Raydt, 1896 c, S. 20 f.
- 61) Raydt, 1896 c, S. 29
- 62) Raydt, 1896 c, S. 28
- 63) Raydt, 1896 c, S. 30
- 64) Vgl., Raydt, 1896 c, S. 28 f.
- 65) Raydt, 1896 c, S. 19
- 66) Ebenda
- 67) Zentralen Staatsarchiv, Dienststelle Merseburg, betr. Sport-Angelegenheiten Bd. 1, Sign., 2. 2. 1. Nr. 15585 Bl. 77–80
- 68) Rühl, S. 47
- 69) Vgl., Rühl, S. 46 f. (こうした事実によってシェンケンドルフは非常に困難な状況に追い込まれた。)
- 70) Rühl, S. 47
- 71) Schmidt, 1915, S. 194
- 72) E. v. Schenckendorff, Denkschrift über die Einrivhtung deutscher Nationalfeste, Leipzig, in: in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 4, 1897 a, S. 306–308
- 73) Rühl, S. 60
- 74) Schenckendorff, 1897 a
- 75) E. v. Schenckendorff, Das duetsche Nationalfest. Ein Entwicklungsgang, seine Bedeutung und Organisation, in: in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 6, 1897 b, S. 1–10
- 76) Schenckendorff, 1897 b, S. 26
- 77) シェンケンドルフは当初身体運動の促進としての祝祭を考えていたが、次第に全ドイツの民族と祖国愛とを関連させた祝祭に興味を抱くようになる。
- 78) Schenckendorff, 1897 b, S. 26
- 79) Rühl, S. 28
- 80) Vgl., Schenckendorff, 1897 a, S. 17
- 81) Schenckendorff, 1897 b, S. 28
- 82) Schenckendorff, 1897 b, S. 21
- 83) Schenckendorff, 1897 b, S. 29
- 84) Vgl., Witte, 1896, S. 4 ff.
- 85) このような考え方はDTのゲッツの考えと類似しているといえよう。F. Goetz, Jahres- und Geschäftsbericht...erstattet in Köln a. Rh. Am 19. Juli 1896, in: Deutsche Turn-Zeitung 41, 1896, 34, Anhang A
- 86) Schenckendorff, 1897 a, S. 15
- 87) Schenckendorff, 1897 b, S. 35
- 88) この委員会は1898年より「ドイツ国民祝祭帝国委員会 Reichsausschuß für die Deutschen Nationalfeste」と名付けられた。Vgl., Deutsche Nationalfeste, Schriften und Mitteilungen des Ausschusses 6, München/Leipzig, 1897, S. 180

- 89) Schenckendorff, 1897 a, S. 25  
 90) Ebenda  
 91) Schenckendorff, 1897 b, S. 35 f.  
 92) Schenckendorff, 1897 a, S. 28  
 93) Ebenda  
 94) Schenckendorff, 1897 b, S. 26 u. 33  
 95) Schenckendorff, 1897 a, S. 24  
 96) 1898年1月16日にはじめて開催地決定投票が行われた。開催地候補となっていたニーダーヴァルト、キフホイザー、ゴスラーの中からわずかの差でニーダーヴァルトが選ばれた。Vgl., W. Rolfs, Die deutsche Kampfspiele I: Die Entwicklung des Gedankens, in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 23, 1914, S. 64  
 97) ライン川付近に建設が予定された祝祭場は南北に大きく広がっていた。その大きさは920×420mにもなっていた。  
 98) Schenckendorff, 1898 b, S. 201  
 99) Ebenda, S. 206  
 100) Vgl., Deutsche Nationalfeste, Schriften und Mitteilungen des Ausschusses, München/Leipzig, 1897, 3, S. 97 und 5, S. 153  
 101) この計画は莫大な資金の調達が可能となったために失敗に終わった。F. A. Schmidt, Der Zentralausschuß für Volks- und Jugendspiele in Deutschland 1891-1922. Ein Rückblick, in: Monatsschrift für Turnen, Spiel und Sport 3, 1923, S. 81  
 102) Deutsche Turn-Zeitung 43, 1898, 52, S.1069  
 103) Vgl., E.v. Schenckendorff, Zehn Jahre unserer Arbeit, Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 9, 1900, S. 11  
 104) Vgl., Deutsche Turn-Zeitung 43, 1898 52, 1069; Schenckendorff, 1900, S. 11  
 105) P. Moldenhauer, Vaterländische Festspiele zu Köln, in: Jahrbuch für Volks- und Jugendspiele 9, 1900, S. 14-19  
 106) Ebenda  
 107) ブラオンシュヴァイクにおけるセダン祝祭は注目すべきであろう。なぜなら、その地の祖國的な祝祭がモデルとして繰り返し実施されたことが文学の中で強調されているからである。Vgl. Witte, S. 20-22; たとえば、ダンツイヒ、ハダースレーベン、ハノーファー、レンツブルグ等で祝祭が行われた。Vgl. Zeitschrift für Turnen und Jugendspiel 15, 1895/96, S. 235-237  
 108) デイームいわく、1913年ベルリンのグリューネヴァルト競技場の落成式の際にはすでに1915年に国内オリンピックが—ZAの会員であるライトヤロルフスなどに依拠することなく—開催されるということが確定していた。C. Diem, Deutsche Kampfspiele 1922, Berlin, 1922, S. 7 参照。  
 109) C. Diem/G. Krause, Deutsche Kampfspiele 1926 zu Köln am Rhein, Berlin, 1926 参照。  
 110) H. Trossbach, Die 3. Deutschen Kampfspiele in Breslau, in: Die Leibesübungen 6, 1930, 16  
 111) Deutsche Turn-Zeitung 79, 1934, 31  
 112) H. Raydt, Deutsche Kampfspiele 1920 und die Leipziger Kampfbahn in: Körper und Geist 21, 1912/13, S. 442; Rolfs, 1914, S. 65

---

〈連絡先〉

著者名：波多腰克晃  
 住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1  
 所 属：日本体育大学体育原理研究室  
 E-mail アドレス：k.hatakoshi@gmail.com